

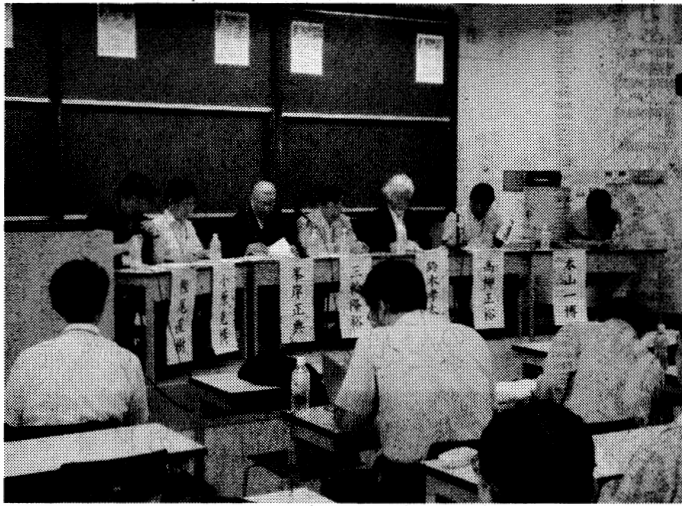
# 宗教間対話の「壁」問う

## 日本はサロンの批判が

10年前の新宗連（新日本宗教団体連合会）50周年を契機に、宗教の枠を超えた教団や宗教者（個人）が集い発足した日本宗教ネットワーク懇談会。その第1回シンポジウム「壁は乗り越えられるのか？」対話の現場から」が9日、東京・三田の慶應大学で開かれた。宗教間対話と協力の実践者が自らの取り組みなどを報告した。約120人が参加した。

シンポは同ネットの「なぜ成立しないのか？」「いま、なぜ宗教間対話と問題提起しながら、「どなか」シリーズの1環。最初に宗教学者の榎尾直樹氏（慶應大学准教授）が趣旨説明。「対話は

貢献したい」と語った。シンポのほか、現場レベルのワークショップも計



宗教間対話の実践者らが発言した（慶應大学）

## 自分をも深める対話も 教団内対話こそ必要

画しているという。同志社大学教授（二神学国際研究センター長）の小原克博氏が「現代世界と宗教間対話」と題して基調報告。欧米と日本の政治や宗教を比較しながら、とりわけ欧米ではユダヤ教、キリスト教、イスラームが様々な面で欠かせないことから「3教の対話は歴史的必然性を有している」と解説。具体的には「第2次世界大戦時のホロコースト」や「9・11以降のイスラームフォビア（イスラームへの憎悪感情）の拡大」といった事例を挙げた。

他方、日本の場合は「弛緩した平和を唱えるサロンの対話」と批判的に分析。その理由として「せっぱ詰まった事情があまりない」ことや、「声高にスローガンが述

べられた」と実践が伴わない「一歩踏み出しにくい」状況から検証した。

同大「二神学国際研究センター」では、イスラームやキリスト教の指導者を招いて緊張感のある対話を実践していることも報告。そして21世紀の宗教間対話の課題として、具体的な課題設定や対話を求めない原理主義的グループとの対話が必要だと主張する一方で、「宗教（教団）の内部における対話の重要性も指摘した。

続いて、3氏が具体的な取り組みを発表。宗教間対話研究所長の峯岸正典氏（曹洞宗長栄寺住職）は僧堂での修行やドイツ修道院での東西霊性交交流などの体験を通じて研究所設立に到ったとい

ことなどを列挙しつつ、「酒の力も」と小さな声で加えた。

このあと4報告者と樫尾氏、真宗大谷派の高柳正裕氏（学仏道場回光舎舎主）、本山一博氏（玉光神社権宮司）の7人でラウンドテーブル式に討論。対話に参加しない宗教組織との対話の場合、教団よりも「興味のある個人」（本山氏）を対象にすべきといった提案や、「近い人間ほど対立が激しいこともある」（高柳氏）として、壁を超えるためにはまず教団内の対話が必要と小原氏の提起を支持する意見も出た。

う。対話のポイントとして「自分が深まっていけるかどうか」を挙げ、「求道としての宗教間対話」という自らの立場を表明した。

日吉神社宮司の三輪孝裕氏（IARF〈国際自由宗教連盟〉評議員）は、1893年シカゴ万博で行われた「万国宗教

会議」以降の宗教間対話の歴史をIARFの歴史と重ねて話した。これをリードしてきたのがキリスト教のユニテリアンた

力していくこと」が方針であり、けっして「（宗教協力）は布教協力ではない」とした。

のだが、1960年代に日本が参加するようになってから、諸宗教間の相互理解と対話がなされるようになった。「世俗的な問題の解決に宗教者が協

練馬宗教懇話会の鈴木孝太郎氏（立正佼成会国際伝道本部長）は約12年前、練馬教会長時代に着手した懇話会結成から具体的な取り組みを発表。寺院や神社、キリスト教

会、天理教など諸宗教者が参加する。区内の寺院で「声明とクレゴリオと雅楽の集い」を催したとやアフガン復興のためチャリティコンサートを実施した。対話が継続できた要因として、地域に根差した会であることや、神学的な討議ではなく出会いを大切にした